

彙 報

京都帝國大學國史專攻學生の

關東地方研究旅行(上)

本學國史專攻學生の關東地方研究旅行は昨年十月二十
八日より十一月三日まで往復一週間、三浦教授中村助教
授指導の下に行はれた。一行十九名、中央文化の淵藪に
入り、又鎌倉に史蹟を巡歴し、水戸に史書を探訪して攝取
するところが少くなかつた。今其概要を左に報告する。

十月二十九日(土) (明治神宮―前田侯爵家
―松平伯爵家―増上寺)

午前七時過先づ明治神宮に參拜する。多田神官に伴は
れて幣を捧ぐ。旅行の第一歩はかくして嚴肅な心持を以
て始められた。次で神苑内の萩御殿を仰いだが、入母屋
寢殿造の優雅な殿舎の南に續く御庭には名にし負ふ秋萩
の朝露にしだれて奥深く松の翠の彼方に續く、石なく柔

かな大和趣味は昭憲皇太后の深く愛でさせられた場所こ
承つてはいさゝ尊い。此の御園は參道を超えて隔雲亭の
方へ續く。自然を巧に利用してさして廣からぬ池も森の
奥に隠れて其の極る所を知らず、池の一方は萬蒲の花圃
に續き、周圍は松栗樺等鬱蒼として都近くとも思はれぬ
別天地、隔雲亭は此を俯瞰するのである。此地はもこ井
伊家の下屋敷であつたのを明治の初年宮内省に買上げら
れ、後昭憲皇太后の御好の地として度々の御幸あつた處
であること云ふ。それより寶物殿に赴く。陳列せられてあ
る御常用の御机、御束帶御正服、御刀劍の外種々の御調
度品によりて大帝の御英姿を偲び奉り、古事記、日本書
紀、神皇正統記、太平記等の和書、五經、論語、貞觀政
要、名臣言行錄等の漢書に依て帝王として御修養の程を
想察し奉つて頭の下るを覺えた。

次に本郷本富士町なる前田侯爵家へこ急ぐ。同家では
書庫移轉の混雜中なるにも係らず貴重な書籍古文書を我
々に展觀せしめられた。先づ注意を惹いたのは土佐日記
であつた。五寸二分に五寸一分弱の小帖子ではあるが、

まがふ方なき定家卿一流の筆蹟になる寫本で、其の奥に「爲令知其手跡之體、如形寫留之、謀詐之輩以他手跡多稱其筆、可謂奇恠」とある様に定家が日記の原著者貫之の筆蹟の眞實を知らしめる爲めに原本を影寫したものである。其の次には「文曆二年乙未五月十三日乙巳病中雖眼如盲、不慮之外見紀氏自筆本、蓮華生院寶藏本」とあつて其の文字に力なく、筆路滯滞して字形も崩れてゐる。これを同時に見せられた所謂高野切と稱するものと對照して見れば、其の相違が明瞭であり、貫之の眞蹟も定家のこの影寫によつて窺ふことが出来るのはうれしい。更に其の次は「料紙白紙不折無端高一尺一寸三分許廣一尺七寸二分許紙也、二十六枚無軸表紙續白紙一枚、端部折返不立竹無紐、有外題土佐日記貫之筆」とあることに依て原本の形狀を髣髴させる。之は當家二代利常卿の蒐集とあつて、表紙は宋代の富田金網の裂を用ひ、内外屏風櫻或は海藻螺鈿の卷繪された書匣に入れ、更に裝飾された桐の外函に收められてあつた。五代綱紀公の蒐集は一層有名である。一行の見た日本書紀一卷は奥書に年月日はない

が書紀寫本中の最古のもの云はれ、朱にて於呼止點を附してある、其本文の旁に施した送假名は古體で外題には「宇治殿弟贈太政大臣能信公手跡也」と見える。傳公任自筆の北山抄、俊房自筆の水左記は何れも絶妙の筆致を見せ綱紀卿自筆の俊房の系圖研究の一冊は丹念な公の面目を躍如せしめてゐる。又政治要略の一卷には「嘉元二年六月一日書寫校合畢」とあり、卷初と卷末に金澤文庫の黒印が捺されてあつた。北條貞顯の書寫せしめたものなること疑無い。この外西宮記、法曹類林及び享祿本類聚三代格は何れも金澤文庫印のあるものである。有名なる豊臣秀吉の三國處置大早計や其高山國に遣して來貢を促した外交文書も出て居る。最後のものは明治七年の火災に遇て焼損してゐるが、鳥子地の料紙に金銀泥の下繪は桃山藝術の一端を窺はれるもので日本前關白の署名の下の方約三寸の金印は其の内容と共に豪宕な秀吉の氣概に打たれる感があつた。

前田家を辭して午後四谷元町なる松平直亮伯邸に赴く平治物語繪卷が先づ我等を囚へた。ボストン博物館蔵岩

崎男爵家と當家とに有るものは現存するこの繪卷の全部であるが、當家のそれは最もよく保存されてゐる。畫面は平治元年十二月二十五日夜、二條天皇私に清盛の六波羅の邸に行幸になつたご聞き公卿百官軍兵等が狼狽して六波羅に向け出發する場面である。一枚一尺四寸弱に、二尺二寸八分の紙をつないだ長卷であるが、此の殺風景な混亂の場面を最も巧みに取扱つて活動せる人物、渦まける火焰を如實に描寫し、御所車の軋る音、馬の嘶く聲も偲ばれるばかり、強烈な火焰の色彩や甲冑具足の鮮かな色合は屋根の落附きたる茶灰色及び人物の薄桃色の頬の匂ひ等よく調和して、活動を表し乍らも全體として典雅な落着きを與へてゐるものである。更に精細に觀察して行くに、そこに描き出されてゐる人物は公武各階級に亙り、其の服裝も種々で、殊に卷末には未だ下着の儘なる人物が殿上に座してゐる杯、風俗史上の新史料を供給するものであり、又角切柱の有様、鷄尾の形狀、寢殿造の全體の構造などは建築史上の重要な參考であつた。文書では佐理卿自筆の消息利休の書狀があつた。前者は

卿が大宰府へ赴任の途中、東宮權太夫誠信に宛てたもので、縦一尺一分、横二尺二分の軸物である。暢達雄健な筆致がゆかしい。此と并べられた佛果圓悟禪師筆法語は傳來にロマンスのあるもので、堺祥雲寺の舊藏であり、それには伊達政宗や春屋、古嶽雲英澤庵等僧俗名士書狀點書等が附いてゐる。尙ほ瀋祖直政卿及び治卿卿（不昧公）の肖像と眞蹟とがある。後者には文政戊寅孟冬紫野大徳寺宗允の讚がある。器物としては本能寺文琳茶入の大名物や政子所持と傳ふる片輪車の手筥杯は治卿卿の蒐集に係り、當家ならでは見られぬ天下の逸物と思はれた。先には加州の松雲公、此處に雲州の不昧公の兩名主の風貌を偲ぶと共に其の文化の擁護者乃至保存者として重大な意義を痛感せしめられた。

増上寺では暮れぬ先に徳川家の靈廟に詣る。台徳院廟は建築最も壯麗で、藤原重繼の彫刻、狩野探幽の壁畫は莊重である。土肥俊勝が奉行となつて、寛永九年七月二十一日上棟したものであると云はれる。拜殿の後方にある八角圓堂には秀忠の遺骨を納めた寶塔がある。經約

九尺の石の蓮臺上に据えられて、七寶蒔繪の精巧なる上に紅黃紫の玉を嵌入して殆ど善美を極めてゐる。堂の側面に二碑がある。一は來迎石と稱し表は彌陀來迎の圖を薄肉彫にし、裏に「台徳院奉拜進寛永十三年藤原重繼」とあり。一は涅槃石と稱し、表に釋迦涅槃像を同く薄肉彫にし、裏には寛永二十一年甲申正月二十四日御彫物師吉岡豊前介藤原重繼上七十五歳上とある。台徳院廟に續いて夫人の廟あり、寛永九年建造で桃山風の雄大な建築である。續いて六代家宣と共に十二代家慶、十四代家茂及び靜寛院宮を合祀申す文昭院廟から七代家繼と共に九代家重を併せ祀る有章院廟に至る。前者は家宣の正徳三年九月生前自ら造營する所であり、後者は吉宗の享保元年七月二十四日上棟したものであつて靈廟建築の最後のものである。これ等を通して桃山後期の建築様式から徳川中期の様式への變化を看取される。續いて方丈に於て當寺相傳の古文書を披見した。江戸時代初期のものが多く保存されて、當時に於ける當山興隆の有様や徳川氏の庇護の淺からざりしことが窺はれた。慶長十三年江戸城中法

論の關係文書當時の住職で本山の中興源譽に對して觀智國師の號を賜つた時の後陽成天皇の宸翰を始めとして幕府よりの御禮物の進獻目録、それに對する請取の女房奉書等があつた。それは慶長十五年七月十九日より同年十一月十二日に亘つてゐる。次に淨土宗諸法度に關するものでは、元和元年乙卯七月日の家康の花押ある縦一尺五寸一分横十尺五分の原本、元和二年十一月日の秀忠の花押ある同原本がある。何れも淨土宗代表として幕府から下附されたもの。恐く元和元年と思はれる九月二十五日の内大臣家康の判物は縦七寸七分横一尺の高檀紙に諸談林に宛て出されたもので、關東淨土宗法度之儀從本寺知恩院相定條々各不可相違儀尤候也と見え知恩院の本寺たることを承認してゐる。下讀法度之事と事書された五箇條は觀智國師の眞蹟で、元和五年初夏二十四日座中に命令された寺内の法規、御佛殿年中行事と稱するものは第二代第六代以下の將軍の法養に關する記録である。明治十年靜寛院宮御新葬記に依つては其の御模様が窺はれる。又版本大藏經數部も展覽されたが、これに據つて宋

版より元版、更に麗版明版と近代化されて來る活字の變遷をも跡附けられた。法然上人繪傳二卷は四十八卷傳と對比して興味深いものである。第二卷末の上人乞食供養の圖には一人の琵琶法師が食を乞はんこよめきながら乞丐の群に入來る狀が描かれて、一般遊藝人の當時に於ける社會的地位も窺はれるものである。斯くて一行が帝都最古の建築の一なる三門を出たのは六時過であつた。

三十日(日)

(鎌倉鶴岡八幡宮—建長寺—長壽寺—明月院—
菴麻跡—賴朝墓—東勝寺—白水莊—光明寺—
長谷寺—大佛)

午前八時過鎌倉に着いて鶴岡八幡に詣でた。舞殿は未だ復興されず徒に礎石を曝し、本殿は修理中で上塗の最中に見えた。本宮廻廊の陳列品を順次見学してから、別室で特に一行の爲めに當社所藏の古文書を見せられた。其は賴朝より小田原北條に至るまでの當社信仰の厚きを證す可き數々の文書であつた。寶治元年六月二十日の將軍頼嗣の寄進狀では三浦氏の叛亂鎮定は神の加護に依るものであるとて相摸國谷部郷を寄せて居り、弘安九年惟康親王の寄進狀では貞時業時の兩執權も連署して武藏國

鹿島田郷を寄せて居る。尊氏の寄進狀には正平六年十二月二十五日のものと觀應三年九月九日のものがある。前者は南朝に歸順して弟直義を討伐する爲めに鎌倉に來た時のものであり、後者は翌年二月九日直義を殺して後幾許もなく再び叛いてから數月のもので觀應の年號を再び用ひてゐることが注意された。足利時代こゝに據つて關東に雄視した關東管領家のものゝ多いことは尤なこゝであるが、野心家の持氏の寄進狀の多いことは反面にその焦燥の程が察せられる。應永二十四年正月一日、同十四年閏五月二日、同三十二年六月十一日、永享四年十月十四日の日附のもの杯がそれである。其等の中には關稅寄進のこゝが現はれてゐて、下總國下河邊彦名關、相摸國小田原關、武藏國師岡保榮關などの名が見える。而して應永年代と永享年代の花押の相違も注意された。天文十五年十月十日の北條氏康の祈願文に、謹奉納願書之事、一三年間毎月可奉參詣事、一萬度可申事、此度駿豆兩國之取合氏康如存可被成遂本意候於其上者右之ニケ條急度可奉果行者也、天文^乙未十月十日平氏康敬白云々とある。

るは其の雄圖が窺はれる。彼に推戴された義氏にも少からぬ志願があつたこと見えて、鎌倉に歸つて戰を鎮定し總房に至る迄手中にすることが出来たなら八幡宮を増築するに云ふ意味の祈願をこめての寄進狀が永祿七年八月朔の日附で納められてゐる。國寶の鶴岡八幡宮修營目論見繪圖は縦一メートル八センチ、横一メートル四センチ大のもので、朱字で修理すべき個所が明記してあり、奉行は増田、山中兩人で天正十九年五月十四日の日附がある。

此處で正平七年正月日の尊氏の袖判ある禁制、康曆三年氏滿自筆の祈願文等の法華堂文書にも接することが出来た。

鶴岡より山内へ赴き、建長寺の倉庫に就いて所藏の古文書畫像圖書等を見た。大覺禪師の畫像の一は跏像で、南山淨慈の贊がある。(國寶)其の精銳俊敏な風貌は黒ずんだ畫面にも尙ほ強い力を以て我等に迫るを覺えた。最明寺時頼の畫像も跏像で禪法を得た前執權の相貌が遺憾なく現はて居り斯くて當山開基の二傑を眼前に見る心地した。以上の外錦光和尙の肖像もあつて、それには享保

己未臘月の贊があつた。建長寺年代記の二帖の原本も見つた。表紙は鳥の刺繡ある縹子地を以て飾られてゐるが、永徳元辛酉年の條に今上帝さあれば南北朝の終即ち後圓融院の時出来たものであること疑なく、後醍醐天皇の條には吉野院として「後號吉野帝、重祚時也、大覺寺王子也」に記される。文永十一年、弘安四年の條を特に切取つてあること、第一帖末と第二帖初めに記事に錯簡あることが注目される。別に當寺の造營修理の時の勸進帳を見たが、一は永正丙子四月二十四日玉隱英與八十五歳の書いたもので、他は明和八年五月、老中が連署し諸堂修補の爲め關州に勸進を許したもので、十月から十二月の期限を附してゐる。本堂に於ては時頼の木像、中尊丈六如來を拜し、鐘樓にては有名な銅鐘を仰いた。銘文の字数總計二百八十、四海之安康云々の文句が刻まれてゐるも面白く、最後に

建長七年乙卯二月二十一日日本寺大檀那相摸守平朝臣時頼謹勸千人同成大器

建長禪寺住持末沙門道隆謹題 都勸進監寺僧琳長

大工大和權守物部重次

さあるここに依て其の由緒が知られる。鐘の構造から見ても、其の衝座が下端より百分三九の場所にあつて可成古い形式に屬するものである。

長壽寺に行けば尊氏の寶篋院塔が窟洞の入口に立てて、方々打壞されながらも全長二尺二寸五分の塔身を現存してゐる。

最明寺の址を見て明月院へ赴いた。明月院舊圖は縦二尺七寸七分横四尺二寸八分、足利氏滿の花押ある古圖で昔の莊嚴を偲ぶこゝが出来た。此圖によれば當時堂塔伽藍の完備して三重塔なごもあり、境外には安國寺の在つたこゝも知られるのであるが今は周圍菜園花園に取まかれた一見在家の屋舎に異らず僅に石階や苔蒸した長い歩道によつて當時を偲ぶこゝが出来た。かくて再び引返して、頼朝の墓に詣で、幕府の跡を弔ひ、若宮小路を南下するこゝ、暫時にして左に折れ、滑川橋を渡れば東勝寺である。高時自盡の跡を弔して踵を廻し、白水莊に立寄る此は比企谷の谿間滑川に臨んだ間島弟彦氏の幽居で、邸

内に徳川頼房の建造せしめたこゝ云ふ英勝寺の山門があり樓上には六地藏を安置される。又其後方には二間四方の入母屋縁側付の持佛堂がある。奈良橋本の陀羅尼寺を移したものと云ふ。棟瓦に正徳二年の銘があるから江戸中期以前のものに相違ない。堂内には木彫の大日如来を安置される。鶴岡八幡宮の一の鳥居を抜けて由比濱から材木座に出で光明寺に着いたのは一時、秋陽松籟は遊子の心を澄ませた。天照山の勅額を山門高く仰いで寺務所に音づれた。此處では法燈の傳承、寺領の相續に關する數々の文書に依つて當寺の由緒を知るに共に、鎌倉室町時代を通じて重をなした有様をも明らかにされ、前日の増上寺の知見と併せて淨土宗に對する理解を深めるこゝが出来た。殊に開山良忠の宗義相傳、所領相續に關する文書は注意すべく、文永九年正月十六日の良忠より寂恵に與へた護狀に「右人爲父子之間永以讓與了云々」とあるこゝに依て良忠と寂恵との關係を明らかにする事が出来る。弘安九年九月六日付のものには、「源空上人辨阿上人良忠三代相傳事世間無其隱皆々可應可也信也授釋寂恵已畢

然者早三代之義勢可被弘通之狀如件」こあつて奥の餘白に左右十指の指印を捺してゐるは面白く、弘安九年九月二十六日の自筆の文書は字行は亂れ、天地不揃であり、字體も崩れて九十歳に近き老僧の筆と頷かれる。此外基氏の貞治二年二月二十七日の宛行狀あり。享祿五年七月

二十三日の義晴の御教書に三浦南北一向宗之檀那悉鎌倉光明寺之可爲檀那者也仍如件とあるは後土御門院御繪旨二通の申明應四年四月二十一日のものに、當寺爲御祈願所須開眞宗弘通之立門奉祈無彊之丹棘者、繪命如此仍執達如件とある、眞宗が淨土宗を意味するものと共に一向淨土兩宗の宗勢の消長をトすべき面白き史料である。

其他同四年五月二日の繪旨は紫衣勅許に關するものであつて、公武信仰の厚きを窺はしめる。天正十八年卯月日秀吉の禁制は其の小田原征伐の折軍勢の亂妨を停止したものの、淨土宗條目五ヶ條は綱吉の貞享二年十二月二十九日寺社奉行の出したもので、他の同十一箇條は貞享二年十一月日の日附で老中の出したものである。又近衛信尹筆の色紙は雄健な筆致で飽かず眺めさせられた。

光明寺を辭して材木座の海岸に出づれば、恰も干潮期で、貞永の昔勸進上人往阿彌陀佛の築いた防波堤の名残が背を見せて海波の彼方へ續いてゐた。由比濱より長谷に至り觀音に詣で大佛を禮して後四時二十分の列車で東京へ引きかへした。

三十一日(月) (内閣文庫―九條家―宮内省圖書寮―維新史料編纂事務局)

午前九時先づ大手門内の内閣文庫を訪ねた。樋口龍太郎氏から本文庫の沿革に就ての説明があつて後我等の爲特に陳列された文書記録圖版等を順次見學した。我等の利用に刷れた大乘院寺社雜事記の原本は冊子の大小區々であるが、紙質は概して疎悪で、尋尊大僧正一流の讀にくき細字で書綴られ、蟲ばんだものも少からず見受けた。

次に山口家記録は山口正信の書いた中御門家の記録で、嘉永より元治に互つてゐる。其中には知行獻上物音信等に關する細密な記録があり、書簡の如きは一々影寫してあり、土産物の煙草の表装までも細かに描寫してゐるのに驚かされた。廣橋家記録では公家有職の精細な記載を見、日野家記録では公武御用日記に於て皇室經濟の有様

が窺はれる。即ち紙漉人夫の救助米支出に就てすらも幕府の許可を要したことが知られる。此は天保元年より弘化元年に亘る記録で日野資愛卿の筆で、其學殖の程も思はれるものである。其他萬里小路家記録、押小路家記録があつた。文書には朽木古文書があつた。其中南北朝のものに觀應二年八月十九日、直訴之輩可誅伐事云々ある尊氏の判物や、曆應二年五月の板崎爲重に尊氏から與へた軍忠狀も見えた。次に莊園の讓狀、年貢米、關稅等の經濟關係を見るべきものも少くない。其中鎌倉時代では弘長元年左衛門尉源氏の讓狀及び副進文、延慶三年十二月一日の讓狀案文、南朝及び足利時代では康暦二年年貢勸定狀、之には其頃の江州高島郡の御藏入石高が記載されてゐる、文明六年十二月及び長享四年の御年貢請取狀、文明七年の皇室御料に關するもの等がある。特に注意すべきは文明四年八月十日の山門西塔に於ける衆議書で、それは西佐々木朽木方に於て船木關の保管人には松波右衛門大夫を任じたが湖上陸地は山門西塔院で管轄することに云ふことを述べてゐる。時代が降て七月十日附の秀

吉の朱印狀に檢地入情之由允候云々、さあり文祿檢地の頃朽木氏が檢地奉行にして盡力したことを賞したものである。文祿三年六月日の同朱印狀には朽木河内守宛に伊勢國安濃郡中を以て二千石を供することが見える。また家康の黒印狀には大坂本丸の普請奉行を朽木氏に宛てることを述べてゐる。其他大和國古文書、山城國古文書等何れも得がたき史料の寶庫である。繪圖類では春日神皇圖、間宮宗倫の北蝦夷地圖、蝦夷國風圖繪あり、殊に伊能忠敬の皇國全圖、それは寫本ではあるが、今更その苦心が偲ばれた。是には文化元年甲子八月の吉田秀賢の外題があり、忠敬の此圖を作る由來を説き、其師高橋至時が彼の測量術の正確なることを褒めて蘭人のそれと一致するに裏書した由をも記してゐる、また紅葉山文庫本で將軍の御手許本と思はれる有名な北條本吾妻鏡、本朝通鑑、國史實錄、三河記、御實記、憲教類典、諸法度、御觸書等があり。是等は何れも氣持のよい美本である。信長記の原本に近きものもあつた。維新史料さすべきものに慶喜公傳、長防追討録、東京府日誌、京都府日誌、

版本太政官日誌、版本外務省日誌、東京開市書類及び當時の諸新聞等があつた。古制度に關する文獻の陳列されたものには、令義解及令集解の古寫本、金澤文庫印ある法曹類林、及び御成敗式目があつた。後者の奥書に、于時文明八季丙申八月八日書訖、右此條永正四年於宇利點校之畢、空海大師遺弟忍海玉葉坊、依難背御命、雖爲志筆任本書寫畢、文字謬定可多歟、外間後見之嘲、諸公之談笑、更以不顧者、只披閱之次、稱名十反廻向奉愼之、穴賢、陰士融覺六十五旬書之、こあるは面白い。また更に一行の欣慰に堪へなかつたのは普通の場合公開されない公文別録、太政類編、諸猷白書類等を披見する便宜を與へられた事であつた。公文別録中に收められた慶應四年十二月の榎本武揚等脱班者から四條殿下に宛てた文書には彼等の行動は國地開拓の意を遂げむ爲めであると言明してゐる。同時に榎本より勝に宛てた書簡にも同様の趣旨を述べ、亂を好むに非ざる事を傳へてゐる。又勝の山岡に宛てた書狀の中はこの榎本の趣旨を報じてゐるのである。又明治六年太政官左院に於ての協議に長慶天皇

の即位を認むべきや否やについては徳大寺實則は之を認むべしと主張し、萬里小里博房は反對してゐるが、結局實則の説は採用されずして即位が認められなかつたことが見える。猷白書の中には、明治七年一月の民選議院設立に關する板垣後藤等建白書の原文及び一八七五年五月十四日付の佛國人ボアソナードの政權四界之事と題して新法學の立場から政府の守るべき權能の限界を示した建白書等もあつた。何れも我國憲政史上に光れる記念塔とも云ふべきものであらう。〔布村〕

● 史學研究會

例會 昨年十月八日午後一時より京都帝國大學樂友會館大講演室に於て開催、左の二氏の講演ありたり。

天台山ミ道教 文學士 井上以智爲君

天台山ミ道教との關係を見るべき資料は天台山志、天台山方外志、天台山全志、天台縣志、浙江省通記、洞天福地記、洞天福地天地官府圖、洞天福地嶽瀆名山記等がある。さて夫等に依つて天台山の位置、道教に關する傳説

等を述べ、要するに此の山に佛教が入つた西紀三六七年頃には既に道教が入つて居たとの説があるけれども、もゝ有つたにしても其の色彩は極めて薄いものであつて、濃い色彩の道教は佛教が入つた後に入り來つたものである。天台山の一方の峰である赤城山に關する道教の傳説は佛教の聖地に入つたものである。佛教と道教とは同時に同地點には起つて居らなかつたのである云々。

漢代の繪畫

文學士 原田 淑人君

從來漢代の繪畫は刀刻のもの、墓に用ゐた煉瓦に刻したもの、鑑鏡の裏にあるものに依つて之を類推した。又畫像石に依りても少くも後漢の繪畫の性質を幾分窺ふことが出來た。支那は周代より文化は相當に開け、春秋時代には壁畫は相當に發達し漢代には夫が一層進歩して居つたこと、思ふ。而して夫れ等の壁畫の題材は色々あつて、其中には道教、陰陽五行の思想、儒家の思想も流れて居り、夫れが繪畫として現れて居つた事は文獻等に依り徴することが出来る。近年樂浪の遺蹟が發掘され、其出土品中の漆器其他に描かれてゐる繪畫によつて漢代

の繪畫壁畫を類推する事が出来るやうになつた。それらに依つて觀るに漢代の繪畫は畫像石で見る如き硬いものではなく、寫生的で描線は流麗道勁なもので、壁畫は相當に立派なものがあつて畫像石で見る如き幼稚なものになかつたことを想像し得云々。

講演終了後、別室に於て茶話會を催し六時半閉會せり大會 昨年十一月五日午後一時より京都帝國大學樂友會館大講演室に於て開催、先づ西田庶務會計擔任より會務會計の報告ありて後左の三氏の講演あり。その間評議員の改選を行ひしが内藤虎次郎氏辭退せられしを以て植村清之助氏新に當選せる外全部重任となり。

近世史學史上に於ける國學の貢獻 村岡 典嗣君
本號に掲載せられたるを以て略す。

史學に於ける過去の認識 文學博士 田邊 元君
歴史は過去の認識なりといふも歴史は現に在るものにして過去は現に在らざるものなり。現に在るものが現に在らざるものに於て成立すとは一見明かなる矛盾なれども過去は現在の過去にして未來は現在の未來なり。過去

は現在の我等がもつ記憶に成り未來はその豫期になることは古來注意さるゝ處なるがその記憶は個人的にあらずして民族的又は人類的なり、又記憶以外の存在として遺物ありこれは所謂史料なるが史料は公共性を有するものにしてそは又歴史の客觀性ニ不可分離の關係に在るものなりされき單なる史料のみにては歴史は成立せず。それに何等かの精神作用が加はらざるべからず。ドローゼンは嘗て歴史は理解 *Verstehen* すといひしがこれこそ歴史を成立せしむる精神作用なり。而して理解は客觀的事象を以て人の體驗が外に表現されたるものとし主觀自身の體驗をそれに投入して内よりこれを理解するをいふ。史料は此作用と結合するによりてのみ歴史たり得るなり。されき我は他ならず他は我ならず我は如何にして他を理解し得るや。こは只事實として認むる外なし。かゝる問を發するは既に他が我を理解する事を前提としてのみ可能なればなり。次に我等は如何にして時を隔てたる過去を理解し得るや、第一に今日の我は昨日の我なる事を證明すべき方法如何。これ亦直接の神祕として認むべき事實

なるのみ。かくして我等は理解を通じて過去を知り得るものなるがかゝる理解の作用は藝術の受容に於ても亦之を見得るなり。而して歴史の内容は過去の現實なるが藝術のそれは假象の世界なりといふ點に兩者を區別せんとするは通常なれどもそは何を意味すべきか。思ふに記憶の中に在る過去は負はされたるものにして我等の左右し得べからざるものにして現在を制約す。そは生の發展に關くべからざるものにして、人はそれとの交渉に於て自己のなり行く目的を豫料し、一定の態度をこるものなり。そこに我等の未來が成立す。かくて現在に生が過去より未來へ、必然より自由へ轉向する契機を成す。然れども藝術は常に無關心なり。歴史に於ける過去の如く生の制約促進に必然的聯關なきものなり。そこに兩者の相違ありて歴史は常は現實の生そのものに直接の聯關を有するなり。而して過去の理解は存在 *Existenz* するものにあらずして生成 *Werdend* するものなり。なんこなれば常に現在の體驗内容を記憶に投入して行はるゝ、理解は畢竟現在に相對的ならざるを得ず。故に現在の體驗内容が變化し豊

富を加ふるに伴ひ過去も亦意味的に變化し豊富を加ふるものなり。かくて歴史の認識は又常に歴史的なりといはざるべからず。かゝる循環的相關性こそ歴史認識の特色にして歴史家は常に現在有する歴史觀を以て過去を制約すこの意味に於て歴史を超越する歴史觀は存在するを得ず云々。

黎軒ミ大秦 文學博士 藤田 豊八君

本號に掲載せられたるを以て略す。

午後六時講演終了、晚餐會を開き・席上白鳥清學士・小野田萬壽學士、小川琢治博士、牧野純一學士、林若吉氏加藤仁平學士、黒正巖學士等の小研究の發表ありて午後十時閉會。

當日の聴講者約三百名にて盛會なりき。翌六日には西本願寺の書院飛雲閣並に什物等を見學せしがこれ亦多數會員の參會ありて盛況裡に前後二日の豫定を終れり。なほ西本願寺にては一同に繪葉書及案内の小冊子を贈られたり。記して謝意を表す。

● 讀 史 會

例會 昨年九月二十二日午後六時半より樂友會館第一號室にて開催。三浦教授中村牧兩助教其他出席者三十名、次の如き研究發表あつて十時散會した。

大寶令公地制の除外例ミなつた土地に就て

布村 安弘君

大寶令に於て原則ミして土地は班田收授して永久相續を許さず賣買をも禁止して自由處分を認めなかつたが其除外例ミ見るべきものが無きに非ずミて、神田寺田宅地園地大功田及び山川簸澤を擧げ、古代精神を參酌して其等の起源を考へ、令解釋家の意見によつて其の性質を述べ、やがて其莊園化する道程を説く

姫路城に就いて 文學士 渡邊 多仲君

先づ地圖に依て其の位置及び城廓ミしての價値を説き播磨鑑等の文獻を引いて其起源發達を述べ、更に最近の撮影に係る寫眞及び圖面に就いて構造を説明する處があつた。即ち城は外中内三廓に區れ、外廓の濠は中廓のそ

れに比して堅固であり、特に西方清水門の側は其の城門の構造は要害に出来てゐる。併し現在は非常に破壊されて櫓形門の原形を止めざるもあるが、大體その原状は察せらる云々。

大津事變に就いて 文學博士 三浦 周行君

明治二十四年五月十一日の大津事變は明治史の波瀾の一であつて、當時政府國民上下の憂愁と驚駭の如何に大なりしか政府は狼狽し殊に犯人處罰に於ては皇室罪に準じて死刑を行はむとしたのに對して國民の一部では憲法の擁護を楮取つて反對し、結局謀殺罪に行はれた顛末を述べ、當時司法權を行政權の干犯から脱せしめて憲法擁護の實を擧げた國民が満足したのであるが、法理論から見ても手續法から見ても謀殺罪の適用は必ずしも正當と云ふを得ざる點を指摘して、現在は別の立場で批判することに可能なりとの意を詳説せらる。

例會 十月二十一日午後六時半より樂友會館第一號室で開會。西田教授中村牧兩助教藤井講師其他二十六名出席、左の講演あつて一時散會。

道元禪師に就いて 寺尾 宏二君

道元の家系生立に論を起して當時僧侶の社會的地位を叙べ、一代の智識一宗の開山と云はれた者も權勢家に資縁して其宗旨を弘めたのに對して、道元は其の名家の出なるの故に有するあらゆる便宜と恵れた條件にも拘らず是等を顧みず深草の草庵より越前永平寺に幽棲して専心内面的充實を圖つた其高風に説き及び、彼が眞個我宗教改革者なることを強調した。

中世に於ける攝津尼崎港に就いて

文學士 魚澄惣五郎君

尼崎の地名が文書に著はれるのは南北朝以前に遡らぬが古くは長洲大洲大神崎の名で呼ばれてゐたこと朝野群載にある神崎の遊女に關する記事等を引き江口蟹島と共に漁士町として早くも繁昌したことを述べ、中世に至ては海産物の主要市場として重要であり、加茂御厨であつたらうこの事を最近の調査に係る嘉曆元年九月十六日起請文以下攝津大覺寺古文書に依て説明し、猶ほ其交通上の要點となり、軍事上に於ても保元物語平治物語玉葉

等にも見え、南北朝足利氏の重視した所なることを述べられた。

明治初年に於ける土地所有權の解放

文學士 牧 健二君
法學士

徳川時代の土地所有權制限の内容の複雑せる事を説き特に永代賣買の制限を中心として其の解放の次第を述べ明治初年の制限撤廢の理由としては自由思想よりも賣買禁止に伴ふ諸弊害、租税金納の必要に起つたことを注意し、地券交附の次第をば實物を示し乍ら説明され、最後に此の解放の國史上に於ける意義を説いて曰く、我國の王土王民の思想は統治を意味するが所有を意味しない、徳川封建制度に於ても所有權を禁止したのでなく統治權に依て制限したに止る、そこに西歐の封建制との間に差違がある、然しこの制限は其後の一般所有權改革の先鋒となつた重要な意義あるものである云々。

例會 十一月二十五日午後六時半より樂友會館第六號室で開催。三浦教授、中村牧助教其他二十九人出席。今回は關東方面研究旅行の報告を以つて主題とし、一行中

の記録擔任布村船津の兩君交々報告の任に當り、三浦教授中村助教佐藤學士井川君等これを補正された。三浦教授よりは又九條公爵家記録中の旅引付、後慈眼院記及び雜抄について特に調査された結果の發表があつた。報告は猶ほ其半ばを餘したが、年次大會の準備について協議を遂げる爲めこれを中止し、十時會を閉じた。

大會 十二月三日正午より樂友會館樓上大講堂に於て第十八回創立記念大會を公開し、各題目の下に新研究を發表するに共に、別室には講演に關係ある記録古文書圖書繪畫其他遺物等を展觀したが、會衆堂に溢れ非常な盛會であつた。午後六時過豫定の講演を終り、更に晚餐會を催した。出席者四十三名、引續いて別室に茶話會を開き快談時の移るを知らず。十時散會。講演概要左の如し。

近世初期文化の歴史的意義 文學士 肥後和男君

近世初期文化を以て桃山的なるものに終結を與へ元祿的なるもの、源泉を養ひしものとして、其過度的意味を考察するに先づ社會的方面から見るに此時代は階級的社會組織の完成した時代で、上層階級から次第に固定して

來た階級化に伴ふ「分」云ふ階級意識の彌漫は家光の態度に表はれ幕府の諸法度に具體化されてゐる。經濟的方面に於ては政治的權力と財力とが分離して漸く町人の擡頭を來し、金銀は資本的性質を有するに至つた。又一般精神生活から見るに潤達であつたが然し外面的な桃山精神が鎖國令や切支丹禁制に現はれる如く内面的整理と充實とに向ひ進んで日本の研究となり、復古精神を喚起するに至つた。更に國史上に於ける近世の意味は古代中世の統合にあるから近世初期はかゝる統合の始つた時代と見るべし云々。

莊 民

文學士 中村 直勝君

近江滋賀郡葛川明王院文書を通じて觀るに此地にあつた無動寺の管轄する葛川莊と伊香立莊との間に鎌倉末から室町時代にかけて三百餘年に亘る塚相論が繰返されたが、文保の場合は領家無動寺が相論の對象たる下立山を兩莊民共用の地として解決した。此頃葛川莊には最上位に常住の僧あつて一切秩序の維持に任じ、其下に住民があつて農耕を主とし領家本所に對する課役を負担した。

元五軒なりしが此頃百餘軒に増加するに至つた。其外に他所より逃竄して來た浪人なるものあり附近住民の患を爲すこと少からず。彼等は文保の相論當時住民の爲めに盡した報酬として浪人の稱を止めて住人と同一待遇される事になつた。併し新に荷擔させられた課役は反て其困苦の因となり後には住民たることを辭退しようとする此浪民が今後住民と融和したか、或は何かの形で存続したか詳にし難いが、室町時代となつて或は一郷の先導者となつたのでないか云々。

菅公と紀傳道

文學博士 西田直二郎君

奈良朝に於て明經文章明法算四道は専ら國家統治の學問たる意義を有した。平安朝に入るにそこに個人的乃至社會的意義も織込まれて、國家を至高な教養機關とせん爲めの學問として紀傳道の發達を見た。其は當時高まつて來た人文意識に負ふもので、菅公はかゝる環境に人となつた。當時紀傳の學者を特に秀才と云つたが、彼の紀傳道は帝王の顧問たる秀才の理想を説くものである。其の編纂を計畫した治道策苑及其の筆になる文德實錄の序

文には此義が窺はれる。更に彼の紀傳道を代表する類聚國史に至ては、六國史と異なる記述法を用ひ、其内容は政術治道を示すもの、即ち記述方法は特に後漢書に負ひ、内容は實用的必要を強調したものである。菅公紀傳道の理想は親房に白石に縦し形態は殊なるにもせよ奥底に流通するものがある云々。

津輕蝦夷の末路

文學博士 喜田 貞吉君

東北地方の蝦夷は石器時代比較的優秀な藝術を所有した事は近來の發掘に依て明である。津輕は已に齋明紀に見える所で最北に住した蝦夷の一種である。奥州の阿倍清原藤原諸氏は蝦夷の出なること云ふまでもないが、鎌倉時代日本將軍の名を以て陸奥津輕の地に雄視した安東氏こそ夷族の最後の頁を飾るものである。安東氏は鎌倉末頻、反亂を企てたことは金澤稱名寺の所藏する文保二年五月の高時書狀、延文年間に成れる諏訪大明神繪詞等に明である。安東氏より出た秋田氏は自ら長髓彦の兄の後裔と稱して日本先住民の出なること強調してゐることには永祿年間作の秋田實季の系圖に窺はれる。津輕家の記

録によれば寶曆年間領内外藩の夷を解放したことがあり文化年間最北宇鐵も夷の待遇を除かれた。要するに夷族の日本化は時日の推移と共に自然に行はれた云々。

新日本の大恩人ゼネラル、グラント

文學博士 三浦周行君

グラントは南北戦争の殊勳に依り米國最初のゼネラルとなり、次で一般の輿望を荷つて大統領となつて、再選の榮を荷ひ、首尾よく任を終へるや世界一週の鹿島立をした。明治十二年六月支那より日本に來遊することゝなつたが我國朝野の歡迎は未曾有の熱誠を以てなされ、米本國にも感謝を以て喧傳された。此間八月十日濱離宮内中島御茶屋に於て行はれた明治天皇ミグラント氏の御對話は歴史的光景であつたが、氏は赤誠を披瀝して、民選議院の問題を始め教育外債、條約改正琉球等内治外交の諸問題に關して忠言を捧げた。氏の意見は反感に深く刻まれて、後日國政御裁斷の際の有效な指針となつた。メキシコミ最初の對等の條約を結び、下關償金の返還を受けたのは氏の此來遊前後の努力の致す所である。斯くの

如く近々二箇月餘の滞在が齎した其感化影響は實に偉大なものあるは氏の高傑なる人格に負ふもので、氏は明治天皇の善良な助言者であつたと同時に新日本の大恩人である云々。

當日第一號第二號兩室に於て展觀に供せられた陳列品は次の如くである。

ゼネラル、グラント關係陳列品

一、グラント氏肖像及傳記

一グラント氏肖像原色寫眞(フィラデルフィア・ブレッツ

附録)

石橋和訓氏藏

一グラント氏全身寫眞(横濱臼井寫眞師の延遠館にて撮

影したもの)

井上 男爵藏

一同半身寫眞(同前)

國史研究室藏

一同令息コロネル、グラント寫眞

同

一グラント氏傳(エンサイクロペディア・アメリカ)

京都帝國大學藏

二、明治天皇グラント氏御對話

一濱離宮中島御茶屋御對話圖(ヤング氏著アラウンド、

ゼ、ウォールド、ウキズ、ゼネラル、グラント)

臨時帝室編修局藏

一濱離宮延遠館圖

國史研究室藏

一同中島御茶屋圖

同

一陪席の三條太政大臣寫眞

石橋和訓氏藏

一通譯の吉田公使寫眞

國史研究室藏

一同夫妻寫眞

同

一供奉の徳大寺宮内卿寫眞

石橋和訓氏藏

一同山口侍從長寫眞

同

一同伏原侍從寫眞

同

一明治天皇グラント氏御對話筆記

井上 男爵藏

一右英文

同

三、グラント氏筆蹟及器物

一自筆書狀二通、一通は一八八〇年十月二十四日華盛頓

にて吉田公使宛令息の名附親となつた當時のもの、

一通は一八八二年二月九日紐育にて吉田氏宛

井上 男爵藏

一グラント氏手記格言和譯吉田氏筆

同

一 グラント氏より吉田公使令息に贈れる洋食器具

同

内一室寫真

石橋和訓氏藏

五、大臣諳啣の書狀

四、琉球及朝鮮問題に關するもの

一三條太政大臣書狀

井上 男爵藏

一 琉球事件原委

中田敬義氏藏

一岩倉右大臣書狀

同

一 グラント氏の仲介によつて開始された日清談判筆記

同

一伊藤内務卿書狀

吉田 子爵藏

一井上外務卿書狀

井上 男爵藏

一井上外務卿の吉田公使宛訓電案

井上 男爵藏

一徳大寺宮内卿書狀

同

一右に對する吉田公使の報告案

同

六、東京府民の歡迎に關するもの

一 米國新聞切抜

同

一當時の錦繪

上野竹次郎氏藏

琉球朝鮮問題に關する米國の反響を見るべきもの

同

尾佐竹猛氏藏

五、グラント氏歡迎に關するもの

一 雅樂演奏圖 (アル氏ライフ、エンド、デイズ、オブ、セ

一上野東照宮境内グラント氏手植檜、同夫人手植玉蘭寫

眞及碑銘拓本 國史研究室藏

ネラル、グラント)

石橋和訓氏藏

一 新富座觀劇寫真

尾佐竹猛氏藏

一東京日々新聞附録上野臨幸御場所之圖

井上 男爵藏

一 グラント氏夫妻、伊藤内務卿、西郷海軍卿、吉田公使其他

見ゆ

七、當時の繪本

同

一 グラント氏一行狩獵寫真

同

一 格蘭氏傳倭文章

假名垣魯文和
解鮮齋永温畫

九册 (三浦周
行氏藏)

一 明治天皇昭憲皇太后御贈品を以て飾れるグラント氏邸

當時の出版物

一 米國前 グラント公傳 岸田吟香編

一冊(同)

一 米國前 グラント氏小傳 (松本亭)

二冊(尾佐竹
猛氏藏)

一通 觀光餘事 埼玉縣令白
根多助著

一冊(同)

津輕蝦夷關係陳列品

一 津輕地方石器時代の土器の寫眞 四十葉

東北帝國大學藏

莊民關係陳列品

一 葛川明王院參籠札 三面

葛川明王院藏

大聖明王 應永十二年
六月十九日

一品准三宮道義

參籠
初度

不動尊 文明十三年
六月廿一日

從一位當子

參籠
初度

大聖明王 文明十三年
六月廿一日

權大納言義尙
初度

一、葛川修驗者等解狀 一卷

同

葛川明王院の寺領四至を言上し、足利氏將軍の證列を得たるもの、その奥にある前天台座主二品尊道法親王、足利義滿、義政、義尙の署名は何れも各その自筆にかゝる。

支那學會

催左の講演あり

一、三田渡の碑文に就いて 文學士 鷺淵 一君

本號に掲載せられたるを以て略す。

一、歿禮について 文學士 佐藤 廣治君

大戴禮禮記等に見ゆる記事を指摘して歿禮を行ふ場合の種類を述べ、宗廟に於ける場合屋上より血を流す經緯武器に於ける該禮施行の有様よりその起原につきて研究の一端を述べたり。

當日會場には三田渡碑文の拓本も陳列せり午後十時散會。

例會 十一月二十六日午後六時半より學生集會場乾室に開會左の講演あり。

一、支那旅行談 文學士 中野長右衛門君

實地調査の結果に基ける現代の葬禮の事情を詳述し、その古禮との關係に及ぶ。

一、支那旅行談 文學士 那波 利貞君

渡支に際し携帶したる研究問題六題の各々につきてその實地研究調査の經緯を述べ、約四十葉の遺蹟の寫眞を

例會 昨年十月二十四日樂友會館にて午後六時半より開

展觀したり。

一、支那旅行談

文學士 高畑彦次郎君

同じく彼地にて實地調査せし支那音韻に關する研究の一端を概論せり。

右終りて同じく最近支那より歸朝せられる狩野教授は支那學界の近情を略述せられ外務省東方文化事業部の事業進行の實況を紹介し大に會員を激勵せられたり。當日會場には那波學士將來の唐代墓誌拓本の一部分、北京東岳廟の大元勅賜領諸路道教事張公碑銘の巨大なる二枚の拓本太平天國印璽を捺せし印影其の他地圖、景印本永樂大典、四庫全集部の様本等を陳列し展觀に供したり、來會者三十五名午後十一時散會せり。

●西洋史讀書會

例會 昨年六月二十二日樂友會館に於て開會、坂口始め十四名出席、左の紹介があつた。

パレスチナに於けるフランクの保護職

吉村彌太郎君

佛蘭西の Bréhar 氏が主張したヘビンよりシャル・マ
ーニユに至る間、フランク王國では、常に保護職をカリ
フの國に送つて居たミ言ふ説を、反駁したシカゴ大學の
Einar Joranson 教授の論文 (American Historical Review
所載) の紹介で、フランクの支配者ミカリフミの間には
政治的提携はあつたミしても保護職存在の事實はなかつ
たミ論じた。

ネフェル、ヘテブ、センプの碑石

文學士 岡島誠太郎君

先年英國埃及發掘財團から本學に寄贈した白色石灰岩
の碑石につき、その碑石の作られた時代、碑石の變遷等
を述べて後、碑文の解讀をした。之はネフェル、ヘテ
センプなる一寶庫書記の遺族が故人の冥福を神に祈つた
ものである。

例會 九月二十八日、樂友會館に於て開催、大雨に係ら
ず坂口教授植村助教菅原學士外先輩學生十七名出席、
左の兩君の讀書紹介があつた。

Earl of Chatham の外交政策

佐知 弘文君

十八世紀に於ける英國の貧民 佐々木 忍君

右の中佐知君は Albert von Ruville の William Pitt. の中の一節の紹介であつて、一七六六年の英普同盟の失敗から印度問題及び佛、西の兩ブルボン家に對する Pitt の外交政策等に就いて述べられた。

例會 十月二十六日、樂友會館に於て開催、坂口教授植村助教を始め先輩學生十八名出席、左の紹介があつた
アルマゲドンへの一里塚 近間 利輔君

歐洲大戰直前の外交關係、たこへば填太利の對セルビア最後通牒、露國の責任或は英國の參戰等につき各國の公文書を用ひ、大戰の責任の所在を論じた。 W. G. S Adams : The Responsibility for the war. (Oxford Pamphlets N. 1).

商人組合について 藤井 謙三君

Max Weber の Wirtschaftsgeschichte 中の Kaufmannsgilden に關する一節を翻譯紹介した。

例會 十一月二十二日、樂友會館に於て開催、坂口教授外十三名出席、左の兩君の讀書紹介があつた。

The Fabian Society 戸倉 廣君

Max Beer : History of British Socialism 中の Fabian Society に關する一節によりて一八八四年一月に於ける同協會の誕生羅馬の名將 Fabius Cunctator に因んだその命名から説き起して同協會の主義、目的及び各種の運動事業に及んだ。

Poils 卅 Urbs 鈴木 成高君

古代希臘に於て發達した、都市の形式たる Poils 古代伊太利に於ける居住様式たる Urbs 卅について Ernest Konemann 氏の論文により、兩者の起原、發達、相異を詳密に解説した。(E. Konemann : Poils und Urbs. Kilo. Bd V.).

●第十三回京都大藏會

昨年十一月六日午前九時より恩賜京都博物館に於て、京都佛教各宗學校聯合會主催の下に第十三回大藏會が舉行せられ、同十二日迄一般の觀覽に充てられた。陳列品を四門に分けてゐるがその第一門は東寺寶菩提院三密藏

聖教の部で、觀自在菩薩心眞言一印念誦一卷(寛弘三年九月二日奥書)以下六十一點あり、就中法皇御灌頂記(一卷)は徳治三年正月二十六日隆長卿記で貞和四年六月十三日書寫の奥書があり、紙背は貞和三年の具注曆で果實の記入がある。圓融院御灌頂記の奥書を合せて史料として興味深く、圖像鈔も亦注目に値した。第二門大谷大學藏燉煌寫經の部の中で、大方廣佛華嚴經卷第四十七(實は六十華嚴卷第五十)一卷の如き延昌二年七月十八日の奥書あり、北京學部、スタイン蒐集本と同類で令狐崇哲の名が見え且つ方一寸位の黒印のあるのが面白い。大智度論卷第九十五、一卷は隋煬帝大業三年三月十五日の奥書によりて供養論として所寫せられたことを示して居り救疾經、菩薩藏(修道)衆經抄卷第十三の如き藏外經で、前者は疑偽經研究上好資料たるを失はない。其他金剛般若經(咸亨四年奥書)を始め同學所藏二十八卷の中尤品十三卷を選ばれて陳列されてゐた。第三門高野版典籍の部には五十餘點、何れも代表的であるが、鈴鹿三七氏藏の三教指歸卷上、高野山金剛三昧院藏の同書卷中下は從來

紹介せられてゐないもので、親王院藏の高野印板注文教相目錄、一帖、秘密曼荼羅十住心論、十帖、水原堯榮氏藏聲明法則、一帖、久原文庫藏遍照發揮性靈集、二卷、東寺大學藏、御請來目錄、一冊、西禪院藏高野版木活字一箱の如きは珍品であり、同開版功績者たる覺智上人像(親王院藏)もかゝけられてゐた。第四門は各宗高僧畫像の部門で、史上の名僧八十餘の肖像を集め、中には未だ世に出てなかつたもの、或は異式のもの杯もあつた此く多數の逸品を一堂に蒐めて展觀した事は未曾有といつてよからう。就中、夢窓國師像(國寶・鹿王院藏)、春屋妙葩像(京大國史研究室藏)一休禪師像(國寶・酬恩庵藏)の如きは藝術的作品として價值にも富んで居り、東大寺藏圓照上人像、泉涌寺藏俊悟國師像の如き其贊文を併せ賞すべく、知恩院藏法然上人像(新出)は周徧に傳繪ありて曼荼羅風、實相院藏日蓮上人像は岸駒筆で木像を寫生したものの、隱元和尙像(萬福寺藏)、慈雲尊者像(神光院藏)の蓄髮ある等は他像を異にしてゐる。神田喜一郎氏藏三國祖師繪一卷は寫補本なるも、從來肖像を傳へない

像の風貌を存してゐる點に價值がある。其他宇多法皇、鳥羽法皇を始め奉り、傳教、弘法兩大師等の肖像を蒐めてゐた。六日午後は同館中央會場に於て水原堯榮氏の「高野版に就て澤村專太郎氏の「藝術史上に於ける我が國肖像畫の價值」の講演があつて、盛會裡に四時半散會した。「井川定慶氏報」

● 歐 米 史 會

雜誌「古代」の發刊 昨年三月英國の M. O. G. S. Crawford 氏の監修の下に Antiquity を題する考古學雜誌が刊行された。氏は英國の Ordnance survey の考古學官であるからその方面の探究は便宜が多いわけである。第一號には Crawford 氏の Lyonesse に関する論文を始めて數名の考古學者が執筆して居る。三、六、九、十二月各十五日發行、年約十三圓、發行所 John Bellows 書店 Gloucester.

Enlart 氏記念事業 前號所報の故佛蘭西中世美術史家 Enlart 氏を記念する爲、同氏記念委員會が組織され、氏

の著書、諸種の研究論文の刊行を行ひ、又氏の名により基本金を積み立て小壯の考古學者をして研究旅行をさせる。萬國ビザンツ研究協會、同協會の第二回大會は四月中旬 Beograd で開かれ各國から專攻の學者が集まり非常な盛會であつた。(第一回は一九二四年 Bucharest で開催された。)言語學、歴史、教會史、考古學その他の六部門に分ち、各部で夫々ビザンツ文化の研鑽、協議、報告を行ひ一週間に亘つた。最後に希臘委員の請求により次回は一九三〇年 Athens で開催を決定、會後會員は Belgrade から Salonika 迄の旅行をして五日の間沿線の舊跡を探した。

Historia の發刊 伊太利の C. Langi 氏外二氏の監修の下に上記の雜誌が刊行される事となつた。之は以前 E. Pais 氏によつて創立された Studi storici per l'archiologia classica (古典古代の歴史的研究所) が新誌名を附したもので、主として古代に於ける古典、哲學、言語學、法律、考古學等の研究に資する。發行所 Popolo d' Italia 社 Milano. 一年約十八九圓。

萬國史學協會 五月中旬獨逸 Goettingen に於て同協會の例會が開かれた。萬國圖書目錄年報の出版を當分佛蘭西に委囑する事、協會事務は獨逸の Reinke-Block 氏を主とし伊太利の Ussani 氏や佛蘭西の Caon 氏等が助ける事等を決議しその他一六四八年以降の外交官人名表の刊行、萬國歴史評論の發刊等も評議され、又歴史教會に關する特別委員會も設立された。同協會は現在歐米の二十九箇國を包有して居る。

「民族及び文明、一般史」前號に紹介した L. Halphen 及び P. Sagnac 兩氏監修の *Peuples et civilisations. Histoire générale.* は最近ストラスブール大學教授 Andre Pignatelli 氏の *La Conquête romaine* を出版した。五百二十頁の大冊、地圖二葉を索引を附してある。前史時代の羅馬民族から説き起して彼等が漸次その勢を地中海岸に廣めて行つた事を述べ、その間東方との關係についても充分な考察を與へて居り、新時代を劃すべき Octavianus の羅馬凱旋を以て終つて居る。この一般史は既に最初に Halphen 氏の *Les Barbares* を出し次いで前號に紹介し

た G. Fongères 氏等の *Les premières civilisations* が出て居るから今度のは第三冊目なのである。

逝ける史學大家、合衆國の James Ford Rhodes 氏は昨年一月七十八歳の高齡を以て歿した。氏は最初實業に従ひ諸種の事業にたづさはつて居たが四十歳の時に全く方面をかへて米國史の研究を始めたと言ふ變つた經歷の人で、南北戰爭時代の研究を以て名高かつた。代表的な著作は一八九二年に筆を執り十四年目に完成した *History of the United States. 1750—1877* の大著である。氏はここに次いで *History of the United States from Hayes to McKinley* 及び *The McKinley and Roosevelt Administrations* を著して立派な合衆國史を残した。

前號で私は Cambridge の中世史の第五卷の紹介をしたが今茲にはその中世史編纂の發案者たる John B. Bury 氏の訃音を傳へなければならぬ。氏は六月一月伊太利で客死したのである。一九〇二年以來 Acton 卿の後を繼いで Cambridge の史學教授として職に就き古代史、中世史に幾多の優れた研究を發表し、且つ Acton 卿の創

めた Cambridge Modern History に倣つて同じく Medieval History 及び Ancient History の編纂を始めたの既に讀者の知る所であらう。就中 Ancient History に於ては氏自身注目すべき數章をものして居り、又氏が出した Gibbon の「羅馬衰亡史」の附註版の權威は普く人々の認める所である。氏の著作は數多いが此處では次の二三を擧げて置かう。History of Greece to the death of Alexander the Great. (1900). The constitution of the roman Empire (1909.) History of the eastern roman Empire, 802—867

中世及び近世初期に於けるロンドン經濟史の權威として聲名の高かつた Gustave Fagniez 氏は六月中旬八十五の長壽を以て亡くなつた。氏は一八七六年創刊した Revue historique の初期の編纂者として同國史學界に貢獻する所多く一九〇一年には Institut の一員に選ばれその後も研究發表に怠らなかつた。次の如き代表的著作を吾々に殘して居る。 Etudes sur l'industrie et la classe industrielle à Paris aux XIII^e et XIV^e siècles. (1877.)

Le père Joseph et Richelieu. La gemme et la société française dans la première moitié du XVII^e siècle.

ルーマニアの有する貴重なる考古學者 Vasile Parvan 氏は六月下旬長逝した。氏の愛國心は最初氏を驅つてルーマニア國民の近代史を專攻せしめんとしたが、氏は國家の未來の爲には却つて古代の研究の肝要なるを知り古代史に志し先づ獨逸に至り研鑽の結果最初の著作 Die Nationalität der Kaufleute im römischen Kaiserreiche. を出した。之は十八年後の今日尙羅馬時代の商業の研究では最上のものをなされて居る。一九一一年には Les inscriptions des pays daco-roumains を著し一九一九年にはルーマニア古代史の概觀たる 「Tara Noastra (我等が國土)」を出し、機會ある毎に國民に古代研究の肝要を説きその爲の努力を怠らなかつたが惜しい哉四十五の壯年で病歿したのである。氏は英獨佛伊の諸語を自由を語り書き、後には匈牙利語さへも修得して居た。〔猪谷〕

會 報

● 評議員改選

昨年十一月本會大會に當り會則により評議員の改選投票を行ひ其の結果新評議員として石橋五郎、羽田亨、濱田耕作、西田直二郎、小川琢治、植村清之助、桑原隲藏、矢野仁一、坂口昂、三浦周行の諸氏當選したり。

● 寄贈交換圖書

梁山夫婦塚に其遺物	朝鮮總督府
日本原始繪畫	高橋 健自著 大岡山書店
日本古典研究	植木直一郎著 著 者
寧樂寺塔記	內藤藤一郎著 著 者
日支交通史(下)	木宮 泰彦著 著 者
復原聖德太子傳曆	聖德太子奉讚會
飛彈史料(維新前後之一)	飛彈史談會
川口常文翁傳	小野村常信著 著 者

國學發達史	清原 貞雄著 大鏡閣
國學院雜誌 三三の一〇・一一・一二	國學院大學
語 絲 一四九	北新書局
中央史壇 一三の一〇・一一・一二	國史講習會
經濟論叢 二五の四・五・六	京大經濟學會
史學雜誌 三八の一〇・一一・一二	史 學 會
史蹟名勝天然記念物 二の二〇・二一	同保存協會
人類學雜誌 四二の九・一〇	東京人類學會
歷史地理 五〇の四・五	日本學術普及會
考古學雜誌 一七の一〇・一一	考 古 學 會
伊豫史談 五〇・五一	伊豫史談會
民 族 三の一	民族發行所
社會學雜誌 四三・四四	日本社會學會
龍谷大學論叢 二七六	龍谷大學論叢社
商業と經濟 八の一	長崎同高商學校研究館
史學會々報 六	神宮皇學館史學會
Westasiatische Studien 28. (Seminars für Orientalische Sprachen zu Berlin.)	

● 會 員 動 靜

● 入 會

鹿兒島縣鹿屋中學校

(右紹介者 新町 德之氏)

赤 鉢 林 太 郎 氏

京都市下京區魚棚醜夕井東入、阪本方

田 村 正 秀 氏

京都市下京區七條大宮、龍谷大學 高 橋 貞 雄 氏

京都市下京區本町十九丁目東入ル吉井町、井上方

能 美 良 材 氏

京都市下京區西七條東野町北小路一八、西村方

宮 崎 圓 遼 氏

(右紹介者 三木 一天氏)

和歌山縣師範學校

(右紹介者 木島 誠三氏)

野 田 爲 一 氏

東京府下澁谷羽澤二三九、穴水方 磯 崎 旭 郎 氏

(右紹介者 笠原 節二氏)

京都府相樂郡木津町市坂

(右紹介者 佐藤 小吉氏)

傳 寶 常 次 郎 氏

仙臺市北二番町一四五

池 田 哲 郎 氏

仙臺市北二番町九九

林 彌 七 氏

仙臺市花壇五、今野方

田 中 宜 太 郎 氏

(右紹介者 原 隨圓氏)

兵庫縣武庫郡今津野

松 坂 青 湊 氏

長野縣諏訪郡北山村湯川、功德寺

小 池 安 右 衛 門 氏

(右紹介者 天沼 俊一氏)

京都帝國大學文學部史學科

中 西 用 康 氏

同 上

加 計 敏 吉 氏

同 上

岩 根 保 重 氏

京都市下京區西九條南田町十一

松 下 清 雄 氏

京都市吉田神樂坂通下大路町四五、岸田方

樺 島 寬 之 助 氏

兵庫縣武庫郡精道村打出

小 林 利 昌 氏

(右紹介者 島田 貞彦氏)

京都市上京區三條室町角 堀部功太郎氏

（右紹介者 沖野安次郎氏）

■退 會

長廣 敏雄氏 山口 昌氏 石野國太郎氏

林 森太郎氏 金子 武雄氏 伊豫史談會

島津家臨時編輯所 勝見 文良氏 菅 貞好氏

■逝 去

堀 鷺五郎氏 飯岡 左内氏 大金 弘道氏

右謹みて哀悼の意を表す